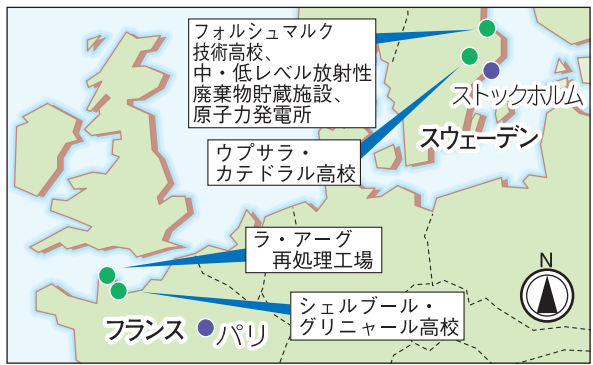


# 視野を広げ国際感覚豊かに

青森県商工会議所連合会が例年開催していた「高校生による海外エネルギー事情研修会」は2020年度、世界的な新型コロナウイルス感染拡大で中止を余儀なくされました。研修会は、本県の高校2年生を対象に、フランスとスウェーデンのエネルギー施設を見学し、現地の高校生と議論することで、将来のエネルギーの在り方について考えてもらうことを目的に1993年度に始まりました。第1回から2019年度の第26回までに参加した高校生は180人。世界のエネルギー事情の知識を深めるとともに、訪問した国の高校生との交流などを通して、国際的な感覚を養い、自身で物事を考えることの重要性を学ぶことができました。四半世紀以上にわたるこれまでの活動を振り返るとともに、これからの研修会の一層の充実につなげるため、過去の参加者4人の今の思いや、研修会関係者からのメッセージを紹介いたします。



フランスのグリニャール高校では、生徒の前で本県高校生がプレゼンテーションを行う。2010年

現在、私は文系と理系の垣根を越えた「リベラルアーツ」を教育理念に掲げている国際基督教大学（ICU）教養学部在籍しています。研修会への参加は、明確な将来の目標設定がなかった私にとっても大きな影響を与え、目指す大学まで決める契機になりました。

2018年度参加(青森県の星高校卒) 川口 深南さん(東京都三鷹市)

この問題へのアプローチは経済や政治など、さまざまな視点から考える必要があると思いましたが、第2にクリティカルシンキング(批判的思考)の重要性です。原子力発電について一般の方はマスメディアの報道をそのまま信じる傾向があるように思いますが、しかし、研修会でエネルギー問題について調べたり、各国の人々と議論したり、報道されている事実と違っている点に気づき、情報をどうのみにせず、客観的に判断するということを知りました。

## 進路選択のきっかけに

第3に外国語を学ぶ本当の意味です。現地高校生と議論し、自分の考えをうまく伝えられない、相手の言っていることが十分に理解できないなど言語の壁があり、とてももどかしい思いをしました。グローバル社会に生きる私たちは言葉の壁をなぐすことが必要だと思えます。そして、より良いコミュニケーションを取ればさまざまな問題が解決できるのではと感じました。外国語はそれを学ぶツールであることを知りました。



スウェーデンのカテドラル高校で地元高校生と楽しく記念撮影—2014年

加が決まってきたら物理の教科書や図書館の専門書をひもといた記憶があります。ラ・アークでは、入構時のものものしいセキュリティチェックから、施設の安全確保上の重要性とエネルギー政策に対するフランスの強固な自然エネルギーを農林水産業で電気自動車・電動車を推進している様子を見てきました。

時代は学会や旅行で海外に行く機会にも恵まれました。現在は自動車メーカーで、部品メーカーに省資源で効率的な生産方法を企画提案する職務に就いています。地球環境を守るため、より多くの人にリーズナブルな価格で電気自動車・電動車を推進できるような各社との協業を行っています。

研修会では、フランスとスウェーデンの両国の最長文化交流プログラムの一環です。欧州への出発に先立ちスウェーデン大使館で話し合う機会を2007年から頂いており、高校生の皆さんをお迎えすることを毎年楽しみにしています。スウェーデンの学校教育は、ある課題に対し自らの考えを述べることから始まり、議論がそれに続きますが、正解を見つけないことはしません。

## 「高校生による海外エネルギー事情研修会」の歩み



研修会に参加し特に印象に残っているのは、フランスのグリニャール高校への訪問です。現地の生徒たちは自国のエネルギー問題に対して、しっかりと知識と意見を持っていました。当時の私はどういっても、議論の土俵にも立てず大きなショックを受けました。エネルギー問題に対しては、自国で起きているさまざまな問題に目を向け、自分の頭で考えて

2009年度参加(八戸北高校卒) 増井(旧姓三浦)真実さん(愛知県豊明市)

「考える姿勢」伝えたい

研修会では「高校の先生、お始めですが、当時のフランスの高校生は、教師の私が今に教える立場となつて思う、国際的な課題について海外の学生とWEB会議をしたり、知識を持ち、自分で考え、議論する姿勢」を生徒たちにも

「考える姿勢」伝えたい

私たちが国民全員で考えている世の中に近づいていくのにはまだ届いていないように感じています。生物が受け持つクラスには、国際的な課題について海外の高校生に「正確な知識を持ち、自分で考え、議論する姿勢」を伝えていけたらと思

第20回の研修会では例年通りフランスとスウェーデンに滞在し、海外の学生との交流や、原子力関連施設の訪問しながらエネルギーについて学ぶ行程でした。未熟な英語での会話や異文化交流など、私にとって全てが新しい経験で毎日刺激的でした。中でも、スウェーデン・ストックホルム市を訪問したことは後の私の人生に大きな影響を与えます。

同市のハンマルビーンヨースタッド地区は世界有数の環境共生都市の先駆けとされています。落ち着いた雰囲気は少なく、中心部には自動車は少なく、次世代型路面電車(LRT)が走行し、さらにペビーカーを押す男性が至る所にいる光景はあざやかな印象です。

2013年度参加(弘前高校卒) 小山内 千登さん(千葉県流山市)

まりに先進的で、日本との違いを感じずにはいられませんでしたが、無知な私は「こんな街をいつか行ってみたい」とおぼろげに思っていました。帰国すると、周りは1年後に控える大学受験の雰囲気となっていました。元々理学部物理学科を志望していましたが、研修会を通じて都市を専門的に学ぶことができる工学部建築学科に変更しました。無事合格した大学では第1志望の都市計画の研究室に所属し、現在大学院でも都市計画を専門に研究を続けています。そして、来年度からはまちづくりを担う総合デベロッパーの業界に就職することが決まり、スウェーデンで「こんな街をつくらせてみたい」と感じたその思いの一端がかなおうとしています。この分野に進みたいと感じることができたのは、研修会に参加できたからだと心から感謝しています。

2020年10月、菅義偉首相は、50年までに温室効果ガス排出を実質ゼロにするカーボンニュートラルを宣言しました。この目標に取り組みには、二酸化炭素を排出しない発電が重要課題の一つになると思えます。安定した電力を供給できる原子力エネルギーは、現在直面している公衆衛生危機などの非常事態を含め、さまざまな状況を幅広く想定した場合に必要な不可欠な電源であるといえます。

フランスと日本は天然資源の少なさなど、エネルギー面で類似点があります。両国がエネルギー関連政策においてさらなる協力関係を築き、再生可能エネルギーと原子力エネルギーにそれぞれの特長を補完し合うエネルギーミックスを実現すれば、カーボンニュートラルな社会という両国共通の目標を達成できるに違いありません。

海外研修の最初の行き先は、フランスのシェールにあるラ・アーク再処理工場でした。原子力発電所での使用済み燃料からウランとプルトニウムを取り出し、新たな燃料とする世界でも数少ない施設の一つで、六ヶ所村の再処理工場が稼働するまで日本全国の原発で発生する燃料の再処理を委託している重要な施設です。当時の私にこうした知識はなく、研修会への参

1994年度参加(弘前高校卒) 工藤 一希さん(神奈川県横浜市)

加が決まってきたら物理の教科書や図書館の専門書をひもといた記憶があります。ラ・アークでは、入構時のものものしいセキュリティチェックから、施設の安全確保上の重要性とエネルギー政策に対するフランスの強固な自然エネルギーを農林水産業で電気自動車・電動車を推進している様子を見てきました。

この研修を通じて、現代の豊かな生活が先端技術に依存している一方、日本ではエネルギーの自給自足が近代化以降、長らく重要な課題であり続けていることを認識できました。これは現在においても解決に至らず、世

持続可能な社会では電源のあり方は極めて重要です。いつか太陽光や潮流、風力などと原子力エネルギーで生み出されるクリーンな電気がより県内の景勝地や温泉地を電気自動車で観光できる時代が実現するよう力を尽くしていきたいと思えます。

研修会では、フランスとスウェーデンの両国の最長文化交流プログラムの一環です。欧州への出発に先立ちスウェーデン大使館で話し合う機会を2007年から頂いており、高校生の皆さんをお迎えすることを毎年楽しみにしています。スウェーデンの学校教育は、ある課題に対し自らの考えを述べることから始まり、議論がそれに続きますが、正解を見つけないことはしません。

青森県は六ヶ所村に使用済み燃料の再処理工場や低レベル放射性廃棄物の処分場があり、むつ市にある使用済み燃料の中間貯蔵施設の使用については大きな議論が起きています。今後も原子力利用や処分についての議論が重ねられていくと思います。1993年度に実施した第1回研修会のメンバーの皆さんは今も40歳前後になり、社会的にリーダーシップを発揮されている世代です。いつか彼らの意見を聞く機会があればと楽しみにしています。